

## 電子メディアと匿名性のコミュニティ

森岡正博

### 情報通信と意識通信

本論文では、パソコン通信に代表される双方向電子メディア空間  
の中で人間関係を、都市社会学の視点から分析し、いくつかの問  
題提起を行なう。電子メディア論は、従来より、コミュニケーション  
論あるいは情報社会学との接点においておにも議論されてきたが、  
それに都市社会学の観点から接近する試みはほとんどなされていな  
い。

パソコン通信とは、自宅や職場にあるパソコン同士を、電話線  
つないで双方向のコミュニケーションを行なう通信形態のことであ  
る。パソコン通信のサービスを行なう民間会社はすでに一〇社以上  
設立されており、日本のパソコン通信人口は、数十万人にのぼると  
言われている。<sup>(2)</sup>

パソコン通信では、キーボードから文字や数字を入力することで、  
おもに文字によるデータ検索やコミュニケーションが可能になる。

現在のパソコン通信で可能になる主なサービスは、(1)データベ  
ス検索、(2)カタログ販売(テレショッピング)・予約・取引、(3)  
電子掲示板(BBS)・電子会議<sup>(3)</sup>、(4)電子メール、(5)フリーチ  
ャット(CB)、の五系統である。このうち、(1)(2)は情報の  
入手や通信販売を目的とするもの、(3)(4)は離れた地域に住ん  
でいる多人数のユーザーたちとリアルタイムのコミュニケーショ  
ンをするもの、(5)は多人数のユーザーたちとリアルタイムのコ  
ミュニケーションをするものである。現在のパソコン通信の使われ  
方は、(1)+(3)(4)という形がもっとも多いと推測される。  
電子掲示板・電子メール・フリーチャットなどを介したパソコン  
通信の人間関係を考えるときに、まずクローズアップされてくるの

が、多人数の人間たちが匿名の状態のままでお互いに情報を交換し合うという人間関係である。パソコン通信で誰かと話をするときには、自分の名前や所属、住所などを表示しなくてもよい。そのかわりに、「ハンドルネーム」と呼ばれる「あだ名」を自分に付けて、他人と会話することが許されている。従って、そこでは、他人同士が、お互いを「あだ名」で呼び合って会話する光景が見られることになる。そしてその会話は、電話のように二人だけではない。リアルタイムでは二〇人以上、非リアルタイムでは一〇〇人以上の人間が会話に加わることもできる。このような「匿名性のコミュニケーション」こそ、パソコン通信の人間関係の特徴付ける第一の性質である。

パソコン通信に参加して、誰かとコミュニケーションする動機には、二種類ある。ひとつは、情報を入手したり情報を相手に伝えたりするために、会話をするというもの。もうひとつは、会話することとそれ自体を目的とするもの。パソコン通信を分析する際には、この二種類のカテゴリーの区別が大変重要になる。一般に、パソコン通信は情報入手のための「道具」としてもっぱら使用されている」というイメージがあるが、それはものごとの半面しか見ていない。

荻野綱男は、この点について次のように述べている。

茶飲み話や井戸端会議に見られるように、話すこと（話し合う

こと）それ自身によって、他人との連帯感を深め、安心を得るという機能もある。そのような機能は、人間が社会的動物であって、一人では生活できない以上、普遍的に見られるものである。現代のような情報化社会においても、パソコン通信のある側面として、現代版井戸端会議ということがある。パソコンを通して、見知らぬ「だれか」と話をするが、そのような話をする<sup>(4)</sup>こと自体が目的であって、情報の入手・交換はどうでもいい場合がある。

パソコン通信を介して誰かと話をするためだけに、パソコン通信世界に入って来るユーザーも多い。ちょうど、電話の使い方に、事件伝達と、会話それ自体を楽しむ使い方の二種類があるのと同じである。

パソコン通信におけるこの二種類のコミュニケーションタイプの存在については、ニューメディア研究者たちによって指摘され始めている。池田謙一によれば、コミュニケーション目標は「目的性の目標」と「コンサマトリー性の目標」に分類される。目的性の目標とは、「何らかの最終的な対象や状態を獲得したり、達成したり、習得するような目標である。」この中には、ニュースを見るときのように「情報の獲得」そのものを目的とする場合と、外出のために天気予報を聞くときのように、情報獲得が手段になる場合とがある。これに対して、コンサマトリー性の目標とは、「何か特定のものを

得るといふところには目標がなく、あることを体験すること、あることを行なうプロセスの経験それ自体が目標になる類の目標である。」たとえば、ロックコンサートで、迫力や熱狂それ自体を楽しむ場合や、テレビゲームを楽しむ場合がこれである。

池田によれば、コンサマトリーな目標追求行動は、「電子メディア技術によってその繁栄を迎え、ニューメディアの発達によってそれをさらに謳歌しようとしている。」そして、「パソコン通信の1つの重要な機能はそうしたコンサマトリーな価値を持つ社会関係の形成にある。<sup>(5)</sup>」

このコミュニケーションの二類型は、古くはアリストテレスの「ポイエーシス」と「プラクシス」の区分にさかのぼるものである。アリストテレスは、神殿を建築する行為のように、行為の直接的な目的がその行為の外にあるようなものを「ポイエーシス（制作）」と呼び、これに対して、道徳的生活のように、行為することそれ自体が目的となるようなものを「プラクシス（実践）」と呼んだ。この区別を、コミュニケーション行為に適用したものが、池田の言う「目的性の目標」と「コンサマトリー性の目標」であるとも考えられる。

私はここで、このコミュニケーションの二類型を、「情報通信」と「意識通信」ということばで呼びたいと思う。すなわち、データや要件や知識などの情報を、AからBへと（あるいは双方向に）正

確に受けわたすことを目的とするようなメディアの使い方のことを、「情報通信」と呼ぶことにする。これに対して、メディアの中で誰かと会話することそれ自体を目的とするようなメディアの使い方のことを、「意識通信」と呼ぶことにする。私は読売新聞で次のように書いたことがある。

なぜ、人は、しゃべるためだけに、わざわざお金を払ってまで、アクセスしてくるのか。それは、おしゃべりを通して何かの価値ある情報を得ようとするためなのではない。そうではなくて、おしゃべりそのものを楽しむためであり、そしてその楽しみはお金を払うのに充分値すると思っているからなのだ。一般化して考えてみよう。おしゃべりそれ自体が目的であるようなパソコン通信。そこでの通信は、情報を正確に受け渡すという意味での「情報通信」ではなく、おしゃべりを通して参加者の意識が触れ合い、渦を巻くという「意識通信」である。<sup>(6)</sup>

「意識通信」ということばには、そこに集まってきた参加者たちの意識が交流し、触れ合って快楽を得るという意味がこめられている。パソコン通信の中のコミュニケーションには、「情報通信」と「意識通信」の二つの側面が同居している。そして、データベース利用などの場面では「情報通信」が前面に躍り出ることになる。逆にフリーチャットなどでは「意識通信」が前面に躍り出ることになる。パソコン通信などの「電子通信」の中で、「情報通信」をメイ

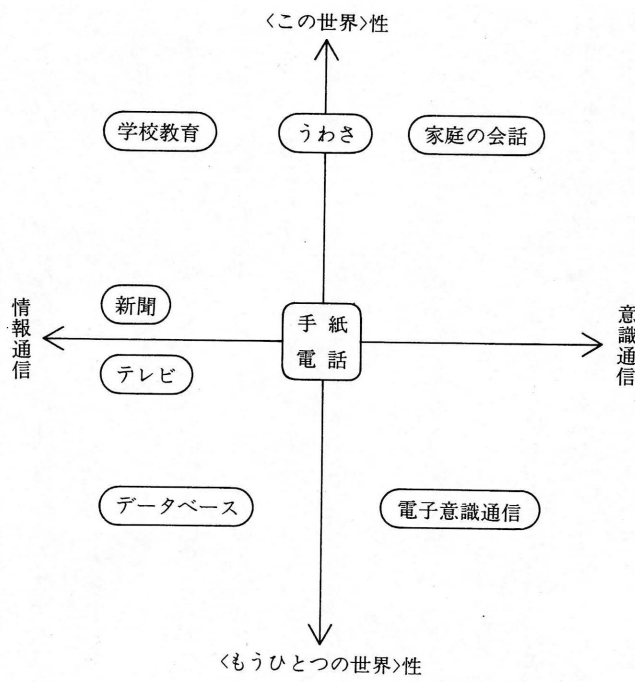


図1 メディアの分類

ンに行なっている場面のことを「電子情報通信」と呼び、「意識通信」をメインに行なっている場面のことを「電子意識通信」と呼ぶことにしよう。そして、特に「電子意識通信」に注目することで、その中での人間関係を分析してゆきたい。

さて、話を先に進める前に、ここで、メディア一般の中における「電子意識通信」の位置付けを確認しておきたい。メディアを、「情報通信—意識通信」の軸と、「この世界性—もうひとつの世界性」の軸と、

「世界性」の軸によって分類してみた(図1)。「もうひとつの世界性」とは、コミュニケーションの行なわれる場が、どれくらい電子メディアのような架空空間に依存しているかという、その度合いのことである。「電子意識通信」が、右下の領域に収まっているのが分かる。

電子意識通信、すなわち、電子の架空空間の中で会話をして意識を交流させることそれ自体を目的とするコミュニケーションが、もっとも濃密に行なわれているのが、パソコン通信のフリーチャットである。そこでは、複数の参加者たちが、匿名状態のまま、お互いをハンドルネームで呼び合いながら、様々な種類のリアルタイムの会話を文字で行なっている。

フリーチャットの意識通信は、二つの類型に分類することができる。ひとつは「喫茶店としての意識通信」である。つまり、何人かの参加者たちがちょうど喫茶店に入ってたわいもない話を続けることのような会話が、その主流をしめる意識通信である。たとえばニフティサーブのフリーチャット(CB)に入ると、そこでは見知らぬ同士が、旅行の話や異性の話を何の脈絡もなく続けている。参加者たちは、適宜飛び入り参加してお喋りをし、つまらなくなったら自由に去ってゆく。

もうひとつは「劇場としての意識通信」である。ここでは、何かのテーマについて、参加者たちが激しく議論したり、ジョークを飛

ばしたりして、際限なく盛り上がってゆく。たとえば、日本テレビのフリーチャット（LINKSのチャンネル・ゼロ）では、番組と呼ばれる時間枠の中で、パーソナリティーと呼ばれるホスト側の一種のDJが会話の流れを取り仕切り、リアルタイムの会話があるテーマをめぐって劇のように盛り上がってゆくことがある。

この二種類は「休息」と「興奮」にもとづく理念型であり、現実のフリーチャットにはこの両者の要素が様々な比率で混入している。一般的に言って、フリーチャットの中では、お互いの匿名性が保たれている。もちろんお互いに自己紹介をしたり、すでに顔見知りであったりする場合もあるが、それはあくまで少数である。匿名性の保証された多数のコミュニケーションが行なわれる場所、それがフリーチャットの世界である。ここでは、参加者たちは自分にハンドルネームを付けており（たとえば「レモンちゃん」、そのハンドルネームのイメージに基づいた「自己演出」が可能となる。従って、レモンちゃんが実は男性であったり、「アンパンマン」くんが実は中年のおじさんであったりする。このような変装は、ばれるときもあるし、ばれないときもある。フリーチャットの世界では、自分の現実の人格の、ある断片だけを抽出して他人の前にさらし、お互いにその断片だけを触れ合わせるといふコミュニケーションが可能になる。これを「断片人格」同士のコミュニケーションと呼ぶことにする。断片人格同士が、自己演出して、匿名性のままコミュニ

ケーションをする。このようなコミュニケーションは、空疎なしらじらしいものに終わってしまうと予想されるかもしれないが（そのような場合もある）、必ずしもそうではなく、あるときは盛り上がり、あるときは親密になり、そうやって何かの快楽と慰めとを得ることも多い。

フリーチャットの人間関係については、後にさらに詳しく述べることとし、ここで視点を変えて、都市社会学の観点からフリーチャットの位置付けを試みてみたい。

#### 匿名性のコミュニティ

さきほどフリーチャットの人間関係としてあげた、「匿名性」や「自己演出」や「断片人格」同士のコミュニケーションなどは、実は、都市の雑踏の中に見られるコミュニケーション形態でもある。たとえば東京のような大都市の盛り場の街路を歩くと、肩の荷が軽くなったような感じを覚えることがある。なぜかと言えば、大都市の雑踏の中で、私は誰からも知られることのない「匿名」の一市民へと変貌するからである。家庭での役割や、職場での自己イメージを離れて、匿名の単なる一個人として私は街路を散策し、ショッピングを楽しむことができる。そして街頭の飾り付けや、人々の楽しい様子などから、様々なメッセージをシャワーのように受け取る。藤竹暁は、人々が銀座のような都心の「雑踏空間」に集まるのは、

「都市の息吹きを呼吸する」ためであると述べる。人々は、「ワインドウ・ショッピングと群れ集う人々を互いに観察しあうこと」のなから、皮膚感覚的に「時代の動き」を感じる「こと」ができる。そして「人間を匿名性の状態のもとで、その全体性を回復させる試みをも、この雑踏空間はもっているのである」と結論する<sup>(7)</sup>。都市の「匿名性」については、多くの社会学者が言及してきたが、藤竹のように積極的にその匿名性を評価する意見は少ない<sup>(8)</sup>。藤竹は、都市の雑踏が、人間の「全体性を回復させる」とまで述べている。この指摘は鋭い。

家庭や農村などの人間関係を考えてみる。ここでは、お互いの名前や性格を誰もが知っており、一緒に仕事をするときも、おしゃべりをするときも、相手の人間を知りつくした全人格的なつきあいをする。また、近隣の人に対しても、家族の一員であるかのような親密な振舞いをする。

これに対して、職場や都市ではそうはいかない。同僚の、家庭での人格とか、休みの日の行動などを知っている人は少ない。都市の街路を歩いている人間は、私にとって赤の他人である。全然知らない他人と話をするのは、道を聞くとときか、ものを買うときぐらいである。

テンニエスは、前者のような、家族や村落で見られるベタベタした人間関係のあり方を「ゲメインシャフト」と呼んだ。そして、後

者のような、都市や国家の中で見られる契約的・打算的な人間関係のあり方を「ゲゼルシャフト」と呼んだ。そして、都市化と産業化が進むにつれて、ゲメインシャフト的な人間関係は衰退し、その代わりにゲゼルシャフト的な人間関係が台頭してくると考えた<sup>(9)</sup>。この考え方は、非常に鋭い点を直観的につかんでいるので、都市社会学やコミュニティ論に大きな影響を与えた<sup>(10)</sup>。

その後の都市社会学は、テンニエスの影響を受けて、大筋では次のような考え方をとってきた。つまり、都市化が進むにつれて、全人格的で親密な暖かい人間関係が崩壊し、そのかわりに、断片的で打算的・契約的な人間関係が勢力を増して、その結果、都市に住む人たちの間に孤独感や疎外感などが広がる<sup>(11)</sup>。そして、マスメディアの情報操作によって揺れ動く「大衆」が誕生するというわけである。

都市化によって、親密で一体的な人間関係が崩壊し、孤独で疎外された個人が大量に出現する。彼らは、お互いに「無関心」で、他人や出来事に対して「自制的」になり、「打算的」で「非人格的」な人間関係を結ぶようになる。社会学者のテンニエス、ジンメル、ワースなどは、このような都市型人間の姿を描いてきた。

しかし、現実の大都市の人間関係は、古典的な都市社会学が描いてきたような「孤独」で「疎外」された「自制的」な関係ばかりではない。たとえば、都市の雑踏の中で、匿名性に守られて、見知ら

ぬ人々と共にいるだけで肩の荷がおりることがある。あるいは、知らぬ同士がお互いに視線を交わし合うことで、一瞬の満足と快楽を得るといふ、独特のコミュニケーションも成立する。

都市の中で、匿名性のコミュニケーションがもつとも典型的に見られるのは、ハイセンスなファッションで身を飾った若者が闊歩するファッション街である。新睦人は次のように述べている。「都市は人工的に形成された世界であるとともに、人々が匿名のまま互いに自分を『つくる』という感覚の発達する生活空間であるから、そもそも都市はファッション空間なのである。」<sup>(11)</sup>たとえば、東京の渋谷や原宿、青山、六本木などの街路やブティックを、ハイセンスのファッションで身を固めて散策する人々のことを考えてみよう。彼らは、何かを見物したり、買ったたりするためにそれらの場所を歩いているのではない。彼らの第一の目的は、自分の気に入るファッションを身に付けて、その場所を散策することそれ自体にある。そこを歩きながら、他人のファッションや雰囲気を眺め、逆に他人からの視線を意識し、あるいはそれらの人々と街路の美観・飾り付けとの調和やアンバランスを楽しみ、流行の波を敏感に把握することそれ自体が、彼らの散策の目的である。

言い換えれば、彼らは、ファッションという装置を媒介にした「コミュニケーション」を、渋谷や原宿の雑踏の中で行なっているのである。会話によるコミュニケーションが、ことばのキャッチボ

ールによって成立するのと同じように、街路でのコミュニケーションは、自己演出したファッションをお互いに表現し合うことによって成立する。たとえば、向かいから歩いてきた男性のコートとマフラーの組み合わせのセンスに、私が一瞬注目したとする。彼はすれちがいざまに、私の視線を感じて、こちらに注意を向ける。このとき、彼は私のファッションから何かの印象を受けるかもしれない。こうやって、この瞬間、二人の間にある種のコミュニケーションが成立する。それは一瞬の敵意かもしれないし、一瞬の連帯感かもしれない。大都市の街路は、このようなコミュニケーションを円滑に活性化する装置に満ちている。たとえば、舗道に面したガラス張りの喫茶店では、店の中にいる女性と、道を歩く男性との間に、この種のコミュニケーションが容易に成立するようになっていく。<sup>(12)</sup>

ハイセンスのファッションで街路を散策する人々は、このようなコミュニケーションを他者や都市環境と行なうことそれ自体を第一の目的として、街に出でくる。私は、コミュニケーション（通信）を、情報の正確な受け渡しを目的とする「情報通信」と、会話することそれ自体を目的とする「意識通信」に分類した。それに従えば、大都市のファッション街で生じているこの種のコミュニケーションは、なによりもまず「意識通信」であることになる。そこでは、ファッションを介して触れ合うことそれ自体が、第一の関心事になっているからである。

大都市の街路で見られるこのようなファッションコミュニケーションは、次のような特徴をもっている。まず、お互いに相手の名前や職業を知らない。これは基本的に「匿名性のコミュニケーション」である。向こうから歩いてきた見知らぬ他人と、匿名の私とが、すれちがいざまに一瞬のコミュニケーションを行なう。無数の匿名の人間たちが、ことばによらないコミュニケーションを街路の上で連鎖させてゆく。大都市の人口と、盛り場の規模がその匿名性を保証する。

匿名の、一瞬のコミュニケーションによって触れ合うのは、お互いの人格のごく一部分、すなわちファッションに関わる部分だけである。ファッションのみを媒介とした「断片人格」同士のコミュニケーション。お互いに相手がどんな人間性なのか、どんな職業なのか全く知らないし、知りたいたとも思わない。二人を交差させるのは「ファッション」だけ。触れ合う面はかぎりなく縮減される。<sup>(13)</sup>

そしてこの触れ合いは、強力な「自己演出」に支えられたコミュニケーションでもある。ハイセンスのファッションで身を飾ることで、私たちは、もうひとりの自分を演出する。普段の生活では発揮できない自分の側面を、ファッションの形式を借りて表現し、誇張させて演出する。職場では地味な女店員が、六本木ではミニスカートのデイスコクイーンとなる。アパートの六畳一間に住んでいる青年が、土曜日には外車に乗って青山通りを曳航する。<sup>(14)</sup>匿名性と、断

片人格同士の触れ合いが一般化している雑踏においては、この自己演出の虚構は簡単に崩壊しない。<sup>(15)</sup>

「匿名性」「断片人格」「自己演出」によって彩られるファッションコミュニケーションは、大都市における新たな人間関係のあり方を象徴している。そしてここで達成されているものは、ファッションを媒介とした濃密な意識交流である。そこで、独特の満足感が共有されることも多いであろう。

都市社会学は、都市化によって人間関係の「親密さ」が失われ、人々は全人格的な人間関係から「疎外」されてゆくと考えてきた。

しかし、都市の内部に「連带的な」人間関係が存在しないと考えていたわけではない。都市化の進行にもかかわらず、都市の内部に、ある種の親密な人間関係が形成されていることを、綿密な調査によって解明してきたのである。それらは「都市コミュニティ」と呼ばれる。たとえば、都市の中の「地域」に密着した「町内会」や「自治会」などのコミュニティ、あるいは趣味の「サークル」や「市民活動」などの「共同作業」でまとまるコミュニティがある。前者を「地域性のコミュニティ」と呼び、後者を「共同性のコミュニティ」と呼ぶことにしよう。後者は、前者ほど地域性に縛られない。<sup>(16)</sup>

しかしながら、そこではやはり次の点が見落とされていたのだ。すなわち、都市化によって、ファッション街の雑踏に見られるような「匿名性のコミュニケーション」が活性化され、自己演出した断



片人格同士が触れ合うことによって、意識が濃密に交流し、一時ではあるが独特の連帯感を獲得することができるという点である。

私は、都市の雑踏で成立している匿名性のコミュニケーションの

特性 人間関係	人格の断片性	親密性	匿名性	自己演出	〈もうひとつの世界〉性
1. 家庭	—	● ●	—	—	—
2. 近所づきあい	●	●	—	●	—
3. サークル活動	●	●	●	●(●)	—
4. ファッション＝ コミュニケーション	● ●	—	● ●	● ●	—
5. 手紙・電話	● ●	● ●	—	●(●)	●
6. 電子意識通信 (喫茶店型)	● ●	● ●	●(●)	●	● ●
7. 電子意識通信 (劇場型)	● ●	●	● ●	● ●	● ●

—…ゼロあるいははずか ●…中程度 ●●…高

図2 人間関係と意識通信の特性

ことを、「匿名性のコミュニティ」と名付けて、「地域性のコミュニティ」「共同性のコミュニティ」の二者に付け加えたい。これは、いわば都市内に見られる〈第三のコミュニティ〉である。匿名性に守られた断片人格同士のコミュニケーションによって形成される、独特の人間関係の場を、「匿名性のコミュニティ」として理念化することで、多くのことが明確になる。そして、この「匿名性のコミュニティ」のさらに洗練された形が、「電子意識通信」世界の中で形成されることになる。

では、ここで、「匿名性」「人格の断片性」「自己演出」という新たな都市の特性に、ゲームインシャフトの特性である「親密性」と、電子メディアの特性である「へもうひとつの世界」性を付け加えて、いくつかの人間関係(コミュニティ)を分析してみたい。とりあえず、「意識通信」の側面をもつ人間関係を七種類選び、先にあげた五つの特性に注目して一覧表にした(図2)。

まず、家庭における意識通信がある。朝のあいさつや休日の団欒、食事の時のなげない会話などが含まれる。ここでは、人間同士の親密性は非常に高い。テンニエスのゲームインシャフトのモデルも家庭であった。しかし、その他の四つの特性はほとんど見られないと言ってしまう。(ただし崩壊しつつある家庭は除く。)

隣家や、同じ地域の人々との近所付き合いはどうだろうか。家庭よりも親密性は減少する。また、普通は、近所の人に自分のすべて

の側面をさらけださないので、人格の断片性が生じてくる。近所の人に対しては「うわべをつくろう」ことも多いので、自己演出も出てくる。

趣味のサークルやカルチャーセンターでの付き合いには、匿名性が加わる。相手が、どこの地域のどんな家に住んで、どんな仕事をしているのか最後までわからずに付き合うこともある。場合によっては、自己演出の度合いが増すこともあるだろう。

ファッションコミュニケーションについてはすでに述べたが、人格の断片性がさらに強まり（ファッションの側面だけの触れ合いに限定される）、匿名性が完全になり、自己演出も過剰になる。人間関係の親密性は、基本的には存在しない。都市に生じた独特のコミュニケーション形式である。

手紙や電話による意識通信は、きわめて特異な性質をもっている。すなわち、手書きの文字や肉声だけに限定された極端な「断片人格」同士によるコミュニケーションであるにもかかわらず、お互いにかなり「親密」な触れ合いを行なうことができるのである。これは、なまの人間に對面して話をするときよりも、間接的なやり方で会話したときのほうが、自分の内面を語りやすくなるという人間の心理によっている。ここには、触れ合う面を減少させることで、逆にお互いの想像力が刺激され、人間の心理の内面へとさらに深く旅することができるという「電子意識通信」世界の論理の萌芽が見ら

れる。

手紙では、文体や字体の選択による自己演出も容易である。また、パーティーラインや「いのちの電話」や不幸の手紙などの特殊例<sup>17)</sup>を除けば、手紙や電話の意識通信には「匿名性」はない。また、コミュニケーションの行なわれる場が、「紙」や「電気に媒介された音空間」である点で、へもうひとつの世界<sup>18)</sup>性が生じてきている。

さて、電子意識通信の人間関係とは、匿名性の保証された架空電子空間の中で、「もうひとつの私」を自己演出し、自分たちの人格の断片だけを触れ合わせることによって、断片人格同士の親密な関係をひとときだけ達成するような人間関係である。これは、「人格の断片性」「親密性」「匿名性」「自己演出」などの特性が、最大に発揮されるコミュニケーション形式である。ファッションコミュニケーションに「親密性」を加味し、あるいは手紙や電話の人間関係に「匿名性」を付加したうえで、強力な「へもうひとつの世界」性<sup>18)</sup>を実現したものだ。（喫茶店としての意識通信と、劇場としての意識通信では、親密性と自己演出に関する若干の違いがある。）

このことを、都市社会学の思考モデルにそって図式化すると、次のようになる。都市化によって、ゲマインシャフトの親密な人間関係が崩れ、ゲゼルシャフトの疎外された人間関係が生じた。しかし、実際には、都市の中にも親密なコミュニティ（地域性・共同性）が存在することが指摘され、その重要性が強調された。この都市社会

学の従来の理論に、私は次のことを付け加える。都市の雑踏の中には、すでにファッションIIコミュニケーションのような「匿名性のコミュニケーション」が成立し、独特の「匿名性のコミュニティ」を形成している。このコミュニティの中では、人々は単に盲目的「大衆」として振舞うのではなく、自分と他人の差異に敏感に反応し、ファッションを媒介にした意識交流によって、満足感と快楽を得ている。そのような匿名性のコミュニティに、人間関係の「親密さ」が加わる場所、それが電子意識通信世界である。電子意識通信は、都市化によって失われてゆく人間関係の親密さや一体感を、都市の匿名性を保証したまま再生させる。

### 電子意識通信の人間関係

では、再びパソコン通信のフリーチャットに戻って、電子意識通信における人間関係のあり方について考えてみたい。以下、匿名性の保証されたフリーチャットを念頭において話を進める。それに注目するのは、匿名性のフリーチャットこそが、パソコン通信の可能性をもっとも先鋭的な形で実現していると思われるからであり、また将来、その可能性が様々な様式で花開くと予想されるからである。まず、それは「虚構」の人間関係である。その虚構性は、電子意識通信の匿名性によって保証される。<sup>19)</sup>

フリーチャットに登場してくる人物たちは、すべて自分の一面だ

けを誇張した断片人格であり、皆それぞれに自己演出している。フリーチャットにあらわれたAさんのイメージと、実際の現実世界での彼のイメージが同一である保証は何もない。自分の年齢や性を偽って登場する参加者もいるし、それを見抜くのもかなり難しい。そして参加者たちは、この虚構性を知りつくした上で、交流場に参加してくるのである。さらに強く言えば、それが虚構であるからこそ、彼らは参加しにくるのだ。虚構の世界には、それなりのリアリティがある。彼らは虚構のリアリティを求めてこの世界にやってくる。

一般に、匿名性のコミュニティには、強い「虚構性」がつきまとう。確かに、自己演出をともなった断片人格同士の匿名性のコミュニケーションによって得られる、満足と快楽と一体感は、あくまでも強い虚構の上に成り立つはかない副産物にすぎない。それらを虚構と知りつつ、しかしその上で、その人間関係に信頼をおいて遊んでみるのが、都市型の意識通信の心性である。<sup>20)</sup>この意味で、虚構の人間関係には、ある種の「ゲーム性」が生じてくる。人間関係をゲームとみなして、ルールにのっとった駆け引きを行ない、それを楽しむ姿勢である。

しかし、虚構の人間関係が、すべてゲームのようなクールなものになるとは限らない。虚構であるがゆえに盛り上がり、連帯することもある。虚構の上に成り立つ「親密さ」もあり得る。

匿名性に保証された一体感と高揚は、たとえばロックコンサート

の盛り上がりにおいて良く現われる。暗闇の観客席では、観客相互の匿名性は保証されている。その上で、演奏のクライマックスには、「この曲を、この盛り上がりを聞きに来たんだ」という独特の一体感・連帯感が、観客たちの間に共有される。もちろん観客はこの連帯感が、ほんの一時の虚構にすぎないことはよく知っている。しかし、そこに連帯感が一瞬でも成立したのは、やはり事実なのである。<sup>(2)</sup>

参加者の中には、現実の自分とは全く異なった自己演出をして通信世界に躍り出てくる者もいれば、逆に、普段のありのままの自分の姿と言葉遣いで出てくる者もいる。前者の人々にとっては、自らの変身願望を満たし、自己解放を達成する絶好のチャンスとなる。

通信世界では、このように過剰に自己演出した人々と、素顔のまま出てくる人々が、お互いに相手の真相を知らないままに交流する場所となる。

ここでは、初対面の相手といきなり会話を行なったり、話がつまらなくなったら一方的にそこから抜け出すことができる。現実の世界でこれを行なうのは、非常に難しい。現実の世界で、知らない人にいきなり話しかけられたら、緊張して警戒する。私が知らない人に話しかけるときの、何かのきっかけを見出そうと気を使い、苦勞する。しかし、通信世界ではその気苦勞は減少する。なにしろ、相手は、自分の自己表現をきっかけにして誰かから話しかけられるのを、待っているからである。ほんのちょっとした勇氣を持つだけ

で、知らない人と会話することができる。

逆に、会話がつまらなくなったら、マウスに触れるだけで、そこから瞬時に抜け出せる。現実の世界では、会話の輪の中から抜け出すタイミングをはかるのが大変難しい。

ただ、現在のパソコン通信のフリーチャットでは、会話に参加するときと、そこから出るときには、みんなにあいさつをするのが慣習になっている。あいさつをせずに突然割り込んできたり、さよならを言わずに消えたりすると、みんなから変なやつだと思われる。また、知らない人と話を続けるには、それなりの話術とテクニックがいる。

通信世界に滞在する時間が長くなると、顔なじみが増えてくる。もちろん、お互いのハンドルネームで呼び合う顔なじみである。すると、顔なじみのムラが形成される。ムラの中では、匿名の断片人格同士の「一体感」や「連帯感」が醸成される。ムラの人々に合流して茶飲み話をするために、毎晩アクセスしてくる参加者も出てくる。ただ、いったんムラが形成されると、たまたまそこに入ってきた新人を、会話の輪からはずしてしまいう現象が生じやすい。ムラにとけこむ技術を持たない参加者は、電子空間の中においても「疎外」される恐れがある。

ところで、匿名性の保証される空間とは、ある意味では「無責任」が蔓延する空間でもある。たとえば、誰かの自尊心やプライヴ

アシーを傷つける発言をして、さっさと消え失せることができる。偽の(?)ハンドルネームを使用していれば、足もつかない。断片人格同士のコミュニケーションができるということは、いわば「仮面」の付き合いができるということである。人は「仮面」を付けると人格が変わる。「仮面」のコミュニケーションが保証されることで、参加者に悪徳の扉が開かれるのである。従って、交流場とは、人間の「暴力性」や「犯罪性」が活性化される空間でもある。

通信世界では、コミュニケーションへの「沈黙の参加」が可能となる。たとえば、パソコン通信のフリーチャットでも、ROM (Read Only Members) と呼ばれる参加者の一群がある。画面の会話の様子を、じっと黙って見ていただけで、決して自分からは会話に参加しないメンバーたちのことだ。数人の会話を、十人以上の「沈黙のギャラリー」が見守っていることもある。ROMの参加者の姿は、交流場でしゃべっている人たちからは見え<sup>22)</sup>ない。もちろんこれは、劇場空間ではおなじみの構図(舞台―客席)だが、喫茶店型の意識通信にも「沈黙のギャラリー」がいるという点が不気味なのである。

電子意識通信では、喫茶店型・劇場型を問わず、このような断片人格同士による独特の人間関係が形成される。その人間関係は、ムラのように緊密に結びついていることもあれば、通りすがりの一瞬の触れ合いにとどまることもあるだろう。電子架空世界の中に成立

するこれらのコミュニティにも、さらに様々な種類と特徴があるに違いない。

電子意識通信の人間関係は、断片人格による、自己演出した、匿名性のコミュニケーションに基づいている。参加者がうまくコミュニケーションするためには、私は、参加者が送り出した断片的な自己表現をもとに、彼の性格や人間性を想像力の中で組み立てなければならぬ。そこでは、私の想像力が最高度に発揮される。意識交流場とは、参加者の「想像力」それ自身が交流する場でもあるのだ。

また、交流場では、参加者それぞれが、自分の人格の中の、他人に向けて表現したい側面と、他人には見せたくない側面とを峻別している。そして、交流場にあらわれない側面については、お互い土足では踏み込まないという暗黙の了解の上で、コミュニケーションが進んでゆく。従って、交流場では、参加者ひとりひとりが望んでいる自己と他者との距離を、みんながそれぞれ尊重するという、基本的な倫理が要請されることになるであろう。そしてこの倫理は、架空世界の道徳空間を律する根本原則となるであろう。

#### 情報社会と都市の進化

では、ここで、将来の電子架空世界でのコミュニケーション一般について考えてみる。二十一世紀の情報社会では、人々は大容量・高速の通信網を使って、地球規模の大量の「情報」を手に入れ、そ

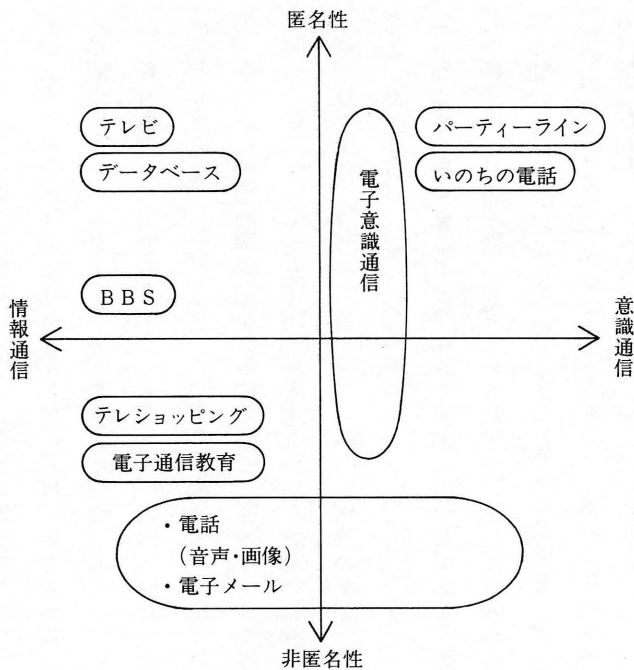


図3 電子通信の分類

れを活用するというイメージがよく語られる。しかし、そのような情報収集の面からだけでなく、電子架空世界に入り込んで様々な人々と意識交流をするという、意識通信の側面も忘れてはならない。電子架空世界でのコミュニケーション一般、すなわち電子通信は、「情報通信」の側面と、「意識通信」の側面の両方から把握されなければならない。

「情報通信—意識通信」という軸と、さきほどの「匿名性—非匿名性」

性」という軸によって、電子通信の全体像を眺めてみると、図3のようになる。電子意識通信は右上の領域に位置する。本論文は、電子意識通信について重点的に述べたので、その他の電子通信への配慮は少なくなった。将来の電子通信一般について考えるためには、さらに図3の全領域をバランスよく考察しなければならないであろう。

最後に、匿名性のコミュニケーションと都市の進化について、ひとつの仮説を立ててみたい。

電子意識通信は、大都市の雑踏の原理を電子世界の中に実現させたものである。これは、匿名性のある電子通信世界そのものが「都市」の拡張であることを意味している。

都市は、ある地域に人口が密集してできた集落として、これまで捉えられてきた<sup>(23)</sup>。言い換えれば、都市とは、ある地理的な「地域」、あるいは「地面」の上に存在するものと信じられてきた。というのも、従来の都市の定義は、社会的、経済学的、人口学的な側面に注目することでなされてきたからである。

では、人間同士のコミュニケーション様式の視点から「都市」を捉え直してみると、どのようなになるだろうか。<sup>(24)</sup>

コミュニケーション様式の視点から見たとき、都市の誕生とは、匿名性のある情報通信と意識通信の誕生を意味する。そして、「都市」は、「匿名性のある情報通信や意識通信を可能にする環境」と

して定義できる。<sup>(25)</sup>この観点から「都市」の歴史を再構成してみよう。都市の歴史は、時代を異にして出現した三つの相が、それぞれ重層的に発展してゆく過程として捉えることができる。

人類が、農耕・牧畜のための小集落の生活に加えて、交易や統治のための都市を発明したとき、そこにはじめて、匿名性のコミュニケーション様式が本格的に生まれた。物品の交換や議論のために、見知らぬ人と接触して会話をするというコミュニケーションが、都市の中で継続的に生じるようになったのである。<sup>(26)</sup>人口の密集した街路では「雑踏」も生じたに違いない。これが都市の歴史の「第一相」である。「雑踏」は、現代の都市にまで引き継がれている。

図書館の成立によって、都市の歴史に「第二相」が書き加えられる。粘土版や紙に書かれた文字を一箇所に集積して、不特定の読者に開放する施設の出現によって、情報通信は、多数の匿名の読者に向かって発せられる「マス・コミュニケーション」の時代へと突入したのである。図書館では、その書物の著者名ははっきりしているが、それを読む側は匿名性のヴェールに包まれている。この傾向は、印刷技術の出現によって加速され、その後のラジオとテレビによって頂点に達した。

「第三相」は電話の発明によって開始される。電話機のネットワークは、匿名の状態で多くの人々が相互にコミュニケーションできる可能性を、潜在的に開いた。それと同時に、電話によるコミュニケーション

ーションは、電気空間の架空世界の中で人と話をするという、新たな経験領域を人類に提供した。この時点で、「都市」は、現実の地理的場所からの束縛を離れて、電気空間という架空世界へと侵入し始めた。

電話のネットワークとコンピュータが接合し、パソコン通信が可能になることで、第三相の都市が本格的に始まることになる。パソコン通信の出現によって、コミュニケーションに参加するすべての人々に匿名性が保証される基盤が整う。そしてこの匿名性のコミュニケーションは、意識交流場という電子架空世界の中で行なわれる。第一相の都市の雑踏で成立したものが、第三相にいたって、電子の架空世界の内部で再現される。「匿名性のコミュニティ」の架空世界化こそ、情報社会のひとつの歴史の意味である。また、巨大な容量をもった電子空間の中で、匿名性のある情報通信もひんぱんに行なわれるようになる。

都市とは、匿名性のある情報通信や意識通信を可能にする環境であった。この意味での都市は、第三相において地理的束縛を離れ、電子の架空世界の一部をもその中に包み込む。すなわち、電子通信世界のなかで、都市それ自体が架空世界にまで拡張したいわば「架空都市」が成立するのである。

このように、都市がしだいにその地理的束縛を離れて架空化（虚構化）してゆくこの流れこそが、都市の進化なのだとは私は考えたい。

架空化した都市は、アメーバ状にその境界を伸縮させる。田舎にいても、森の中においても、電子通信の端末機の前に座れば、「都市」は田舎に住む私の目の前にまで延びてくる。<sup>(27)</sup>「産業都市」から「情報都市」へとということが言われるが、本来の「情報都市」とは、ここで述べたような、場所を持たない架空都市の意味でなくてはならないのだ。

パソコン通信の中のフリーチャットに注目し、さらにその中でも匿名性にもとづいた電子意識通信の形態を分析することで、架空世界でのコミュニケーションのひとつの特徴的なあり方を説明してきた。そして、都市社会学の視点から、このコミュニケーション形態の社会的・社会心理学的説明を行なった。匿名的な人間関係を、従来の社会学は〈大衆〉としてのみ捉えてきたが、その枠組みの有効性はもはや限界に近づいている。大衆を生み出したのは、ラジオ・テレビに代表される一方電気メディアであった。しかし、現在、パソコン通信やケーブルテレビに代表される双方向電子メディアが着実に社会に浸透しつつある。そのハードウェアの浸透は、ラジオやテレビがなし得なかった、新たな「人間の群れ」の形成を、徐々に始めているにちがいない。

本論文は、その新たな人間の群れのひとつの生態を、パソコン通信のフリーチャットに見出そうと試みたものである。今後、開花するであろう電子架空世界でのコミュニケーション論・社会学・文化

人類学のための、ひとつの礎石として利用されれば幸いである。

#### 注

- (1) 最近では、竹内郁郎・児島和人・川本勝編『ニューメディアと社会生活』東京大学出版会 一九九〇 がある。
- (2) 日本の大手の商業パソコン通信会社である、PC-VANの一九九〇年七月の会員数は約一五万人、ニフティサーブは一三万人である。一九九一年には、パソコン通信人口は五〇万人を超えるという予測もなされている。また、同じく大手の通信会社であるアスキーネットの年齢別ユーザー層を見ると、25―29歳 27%、30―34歳 25%、35―39歳 15%、20―24歳 13%となっており、二〇代―三〇代のユーザーが主流であることが分かる。(『日経パソコン』一九九〇年八月二七日号 一九〇頁以降)
- (3) 電子掲示板の上で行なわれている電子会議が主流であるが、中には、フリーチャットの内部でリアルタイムで電子会議(的なもの)が行なわれることもある。従って、電子会議のカテゴリー分類は、正確には(3)と(5)の両方にまたがることになる。
- (4) 荻野綱男「コミュニケーションの記号と意味作用」林進編『コミュニケーション論』有斐閣 一九八八 二二〇頁
- (5) 池田謙一「ニューメディアの利用と満足」竹内郁郎・児島和人・川本勝編『ニューメディアと社会生活』一四五―一四八頁
- (6) 森岡正博「意識通信」『読売新聞』大阪版 一九八九年一月九日夕刊



- (7) 藤竹暁「都心空間とコミュニケーション」倉沢進編『都市社会学』東京大学出版会 一九七三 一〇六、一一九、一二〇頁
- (8) たとえば、ゾンバルト、パーク、ジンメル、ワース、パソンズなども匿名性に言及している。なかでもジンメルとワースは、都市の匿名性が、人間性に悪影響を及ぼすかのような口ぶりである。(鈴木広編『都市化の社会学「増補」』誠信書房 一九八七年 一〇二、一三六頁参照)
- (9) F・テンニエスは、一八八七年の著書『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で、この二つの概念を区別した。それによると、家族や友人や近隣の人々に囲まれているときの「すべての信頼にみちた親密な水いらずの共同生活」のあり方がゲマインシャフトである。これに対して、大都市や国家に見られるような、「人々はそれぞれ一人ぼっち」であって「各人は他人が自己の領分に触れられたり立ち入ったりするのを拒絶する」人間関係のあり方をゲゼルシャフトと呼んだ。ゲゼルシャフトでは、人々は合理的な打算によって行動し、利害の一致にもとづく一面的な人間関係を結ぶ。テンニエスは、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行を「発展」と考えていた。そして「ゲマインシャフトの時代は一体性・慣習・宗教としての社会意志によって特色付けられており、ゲゼルシャフトの時代は協約・政治・世論としての社会意志によって特色付けられている。」その結果「大都市や首都、特に世界都市においては、家族生活は滅亡してゆく。」(『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波文庫 一九五七(上)三五、五〇、六一、九一以降、二〇四頁、(下)一九六、二〇三、二〇八頁)
- しかし、テンニエスは、大都市のゲゼルシャフト優位社会においても「ゲゼルシャフト的親密さ」や「ゲゼルシャフトの一体感」が存在し得るという点に、さほどの注意を払っていない。
- (10) ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの区別は、その後の都市社会学に大きな影響を与えた。たとえば、パークは、C・H・クルーラーの定義を受けて、都市に見られる直接的・対面的で親密な人間関係を「第一次的關係」と呼び、これに対して、交通・通信手段の発達によってもたらされた間接的な人間関係を「第二次關係」と呼んだ。(パーク『都市』『都市化の社会学』七六、七七頁)
- (11) 新睦人『情報社会をみる眼』有斐閣 一九八三 一四一頁
- (12) 吉見俊哉は、東京の渋谷を説明して、「七〇年代の終わり頃までは、街は、すでに小群化した若者たちがやって来て相互の差異を確認する場所へと変質していった」と述べている。そして、「渋谷がファッションの街であるというのは、まさにこうした「見る・見られる」(＝演じる)という回路を過剰に保証しているからにはかならない」と述べる。的確な把握である。吉見によれば、渋谷のバルコのオープニング・キャンペーンのコピーは、「すれちがう人が美しいー渋谷・公園通り」であったという。(吉見俊哉『都市のドラマトウルギーー東京・盛り場の社会史』弘文堂 一九八七 二九五―二九九頁)
- (13) もちろん、服装のセンスや身のこなしに、その人の性格や生活環境がにじみ出てくることはある。
- (14) 新睦人は、「仮面をつけて生きる都市の匿名空間は人びとの変身願望を充たす格好の場面」であると述べている。(新睦人『情報社会をみる眼』一四五頁)
- (15) 吉見俊哉は、「七〇年代の都市空間の状況を〈演じる〉ことの

突出として把握した」ととき、都市の中の人物が「演じる」とは、他者たちの前で「本当の」自分とは異なる「虚構の」人物に扮し、あたかも自分がそうした人物でもあるかのように振舞うことである」と述べる。都市の舞台装置の中で行なわれる、このような「演じる」ことに対する評価は、同書の最終章に詳しい。(吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー—東京・盛り場の社会史—』三四四、三四八頁)

(16) 「コミュニティ」は、アメリカの都市社会学で用いられてきた重要な概念である。R・M・マッキーヴァーは、一九一七年の著書『コミュニティ』の中で、「コミュニティ」概念と「アソシエーション」概念とを区別した。コミュニティとは、村や町や国など、様々なレベルで営まれている人間たちの「共同生活」のことである。これに対して、アソシエーションとは、ある共通の関心のもとに人々が結集したときの組織体のことである。たとえば、火事を消すために近所の人々が臨時の消防隊を作って、消火活動を行なうとき、これがアソシエーションである。マッキーヴァー自身も述べているように、コミュニティとアソシエーションの区別は、ゲメインシャフトとゲゼルシャフトの区別とは異なっている(マッキーヴァー『コミュニティ』ミネルヴァ書房 一九七五 四六一—四九頁)。しかし、「コミュニティ」ということは、その後、人間社会学の「コミュニティ」概念などと合流し、都市内のまとまりを持つ人間関係一般を指すことばとして定着した。ただ、G・A・ヒラリーも述べるように、「コミュニティ」概念の共通了解は存在しないようである。(ヒラリー「コミュニティの定義」『都市化の社会学』三〇三頁以降)

日本では、特に、都市に見られる疎外や冷たい人間関係を修復するためのキーワードとして、都市の内部での「コミュニティ」の回復が唱えられてきた。園田恭一は次のように表現している。「コミュニティ」という言葉が、連帯性や共同性や一体性や暖かさなどの内容を含んでいるがために、今日、現実的にも、自己疎外や大衆社会化現象との対置で、なにかそれらの問題を解決し、解消する打出の小槌のような期待や願いを込めて広く用いられている：「(園田恭一『現代コミュニティ論』東京大学出版会 一九七八 iii頁)。奥田道大は、人々が「コミュニティ」ということばを使うときに、「ひろくは、『人間性の回復の生活基点』とか『精神的、情緒的安定の場』といった規定にポイントが合わされている」ことを指摘している(奥田道大『都市コミュニティの理論』東京大学出版会 一九八三 二五頁)。しかし、このような、コミュニティの復権によって都市問題を解決しようという考え方に対しては、奥田が紹介しているような根本的な批判がある(奥田 同書 一六八頁)。なお、テンニエスは、共同購入と自力生産のための協同組合(ゲノッセンシャフト)によって、「ゲメインシャフト的な経済原理」と「ゲゼルシャフト的生活条件」が止揚されると述べている(ゲメインシャフトとゲゼルシャフト)一三五—一三六頁)。このゲノッセンシャフトの捉え方は、近年の「コミュニティ」の概念の一部と近いものをもっている。

コミュニティを、その「地域性」に注目して捉えると、町内会や近隣住民などの人間関係が前面に出てくる。これに対して、その「共同性」に注目して捉えると、サークル活動や市民運動などの人間関係が前面に出てくる(園田恭一『現代コミュニティ論』一五

頁以降／松原治郎『コミュニティの社会学』東京大学出版会 一九七八 三三頁以降)。「地域性」と「共同性」の差異は、重要である。後に述べるように、都市の進化の方向は、その地域的束縛を離れる方に進むのではないかと、私は考えている。

ニューメディアであるケーブルテレビ(CATV)の導入に際して、それが地域社会のコミュニティを作り上げるための道具になり得るといふ期待があったことは、注目に値する。竹下俊郎は、日本での調査にもとづいて、「CATVが受け手の地域意識を醸成することで、コミュニティ形成に寄与する可能性が高いことを示唆している」と述べている(竹下俊郎「ニューメディアと地域生活—CATVを中心として—」『ニューメディアと社会生活』三五頁)。これが事実であるとすると、電子メディアは、電子空間の内部のみならず、現実世界においてもコミュニティ形成の原動力となり得ることになる。

(17) 電話上で行なわれる「パーティーライン」(NTTの付加価値通信網であるダイヤルQ2の中で民間会社が行なっているサービス。多人数の人間が一度に会話できる。)や「いのちの電話」は、いわば匿名性の保証されたフリーチャット音声版であり、次項の電子意識通信の人間関係ときわめて近いものをもっている。電話を使った意識通信の中で、その匿名性の点から特に注目されるのは、「いのちの電話」と「テレフォン・セックス」であろう。前者は、こころの悩みを持った匿名の人物が、カウンセラーに悩み事の相談をするものであり、自殺やレイプなどのかかなり深刻な問題が話し合われる。後者は、電話の音声を利用した性行為であり、一方的な「いたずら電話」的なものから、商業ベースののっつい

るもの(テレフォンクラブなど)まである。これら匿名性の断片人格同士の意識通信は、「こころのカウンセリング」あるいは「性行為」というその親密度において、きわめて注目に値する。電子意識通信の親密度は、当分の間は、これらの親密度には決して及ばないであろう。

(18) 現在の通常のパソコン通信の電子会議やBBSが、趣味や興味別のグループでまともまっていることを考えれば、電子意識通信の人間関係とは、趣味のサークルや市民活動の架空世界版であると言うことができる。

(19) しかし、ホスト側の管理部門の人間たちは、参加者たちひとりひとりの発言や動向を一括管理することができる。従って、管理部門から見れば、参加者たちの匿名性は原理的には一切消失する。交流場でどんな仮名を使って演技しようが、すべてバレてしまう。もちろんその情報は極秘で管理されるであろう。だが、この事実も、通信世界の虚構性を保証している「匿名性」それ自体が、もうひとつの「虚構」であることを示している。人工衛星からの超高感度撮影によって、都市の町並みや人ごみまでモニターできる情報社会において、「匿名性」とは何なのかをつきつめて考えてみる必要がある。

(20) これは、たとえば、九鬼周造『いき』の構造(岩波書店 一九三〇) 浅田彰『構造と力』勁草書房 一九八三)によって示唆された人生論につながる考え方である。

(21) 新睦人は、都市の中で若者が連帯する空間が消失したことに触れ、次のように述べる。「たとえば、子供たちは深夜放送のディスク・ジョッキーに、つかの間の連帯の時を求めながら、つくりごと

の友情に酔いしれる。」そしてこのような事態を憂慮している（新  
睡人「情報社会を見る眼」一八二頁）。しかし、友情や連帯とは、  
そもそも「つくりごと」であるという考え方に立てば、また別の  
見方もできるであろう。人々が架空世界の中で、つかの間のつく  
りごとの連帯にひたるのは、さびしいことではあるが、また美し  
いこともあるのだ。

(22) 参加者の人数が表示されるネットでは、ROMの数を監視する  
ことができる。HABITATのように、参加者の姿を画面上に  
投影させることができれば、ROMも減るだろう。ニューメデ  
ィア論は、パソコン通信などの双方向メディアの出現によって、  
人々は情報発信型の積極的な役割を担うようになると予測してき  
た（たとえば川本勝「メディア構造の変動と社会生活」『ニューメ  
ディアと社会生活』一六一―一七頁）。そのようなニューメデ  
ィアは、ROMの存在をどのように考えるのだろうか。ROMの存在  
は、「ニューメディアの逆説」を提起しているのかもしれない。

(23) M・ウェーバーは、都市を比較的大きな集落と規定し、次のよ  
うに述べる。「都市とは、巨大な一体的安住を示すごとき集落―こ  
こに集落とは家と家が密接しているような安住を云う―であり、  
したがって、そこには、都市以外の隣人団体に特徴的な・住民相互  
間の人的な相識関係が、欠けているということである。」（ウェー  
バー『都市の類型学』創文社 一九六四 四頁）ワースは、次の  
ように定義する。「社会学上の目的のためには、都市は社会的に異  
質的な諸個人の、相対的に大きい・密度のある・永続的な集落であ  
る、と定義されよう。」（ワース「生活様式としてのアーバンイズム」

『都市化の社会学』一三三頁）

(24) 「都市」の定義ではないが、吉見俊哉の「盛り場」の定義は、こ  
の意味で注目に値する。彼は、場所としての盛り場という捉え方  
を否定し、「出来事」としての盛り場という捉え方をする。「盛り  
場は、施設の集合や特定の機能をもった地域としてある以前にま  
ず「出来事」としてあるのだ。……「盛り場」とは、恒常的に多  
数の匿名的な人々が盛っていることであって、そうした「こと」  
を取り囲んでいる諸施設ではない。それらの諸施設はいわば舞台  
装置にすぎず、「盛り場」という「出来事」そのものではないので  
ある。」この考え方を、都市概念に適用すると、本文で述べる考え  
方となる。吉見はさらに述べる。「こうした盛り場概念の再規定は、  
盛り場研究を従来の地理学的なものや（狭義の）社会学なもの  
から、むしろ社会的ないし人類学的なものへと移行させること  
になる。」この捉え方は、G・ルフェーブル以来の、都市騷擾研究  
の延長線上にあると言う。（吉見俊哉『都市のドラマトルギー―  
東京・盛り場の社会史―』二四、二五頁）

(25) この定義中の「匿名性」は、完璧な匿名性でなくてもよい。顔  
は見覚えがあるが、名前は知らないというのも、ここでの匿名性に  
含める。この意味での匿名性は、小集落の中にでも、ある程度は  
発見される。小集落の中にも「都市」の萌芽は存在しているので  
ある。

(26) 都市の中で芽生えた匿名性の意識通信を、最初を利用してシス  
テム化に成功したのが「売春」である。他の地域からやってくる  
客と、売春婦は、互いに匿名（あるいは偽名）でありながら、性  
行為という非常に親密な意識通信を行なう。従って、意識通信を  
商業化しようというこれ以降の試みは、すべて「売春」の末裔に

他ならない。都市の雑踏が歓楽街を生み、伝言ダイヤルがセック  
ス・メッセージばかりを生み出す原因は、その源流に求めなければ  
ならない。

(27) トフラーの「エレクトロニクス・コテッジ」を、このような文  
脈で再解釈すると面白い。(A・トフラー『第三の波』中公文庫  
一九八二 第一六章)

\* 本論文は、国際日本文化研究センターの共同研究「『場』の日  
本文化」(代表・村井康彦)の一九九二年一月二十八日の研究会で  
発表した原稿を増補改訂したものである。研究会の質疑応答で、貴  
重なご意見をいただいた共同研究員の方々に心から感謝したい。な  
お、本論文の論旨を拡大して、電子メディアの可能性を論じる『意  
識通信』が来年刊行される予定である(福武書店・一九九二年冬予  
定)。著者の包括的な立場については、そちらを参照していただ  
ければ幸いである。